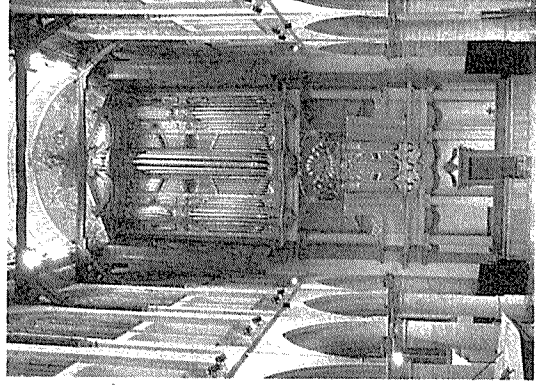


オルガン新世代 世界へ

日本人の若手オルガン奏者が、国際コンクールで相次いで優勝している。パイプオルガンは、ヨーロッパを中心にキリスト教社会で発展したが、国内ではバブル期、各地のホールに広がった。1980年代以降に魅力を知った世代が、本場に活路を求めているようだ。(淵上えり子)



「シュニットガー国際オルガンコンクール」の会場になった聖ローレンス教会のパイプオルガン (photo by Jan Zwart)

6月26日に福本茉莉(26)が独「ニルンベルク国際オルガンコンクール」で、同日には北村あゆ美(35)がオランダの「シュニットガー国際オルガンコンクール」で、それぞれ優勝した。2008年には青木早希(31)が仏「シャルトル国際オルガンコンクール」を制し、欧州で日本勢が成果を上げている。

その理由を、オルガン奏者の松居直美・聖徳大教授は「30年近く前に、公共ホールでパイプオルガンの設置が流行したことに関係している」と指摘する。

日本オルガニスト協会によると、国内では1985〜92年に27台のパイプオルガンが設置された。それまでは3百数十台しかなかったとみられ、集中的に置かれたことがうかがわれる。従来は教会やキリスト教系の学校が多かったが、バブル景気も手伝って、公共ホールへの導入も目立つようになった。

代表的なのは、86年に開館したサントリーホール(東京)。関西では82年開館のザ・シンフォニーホール(大阪)

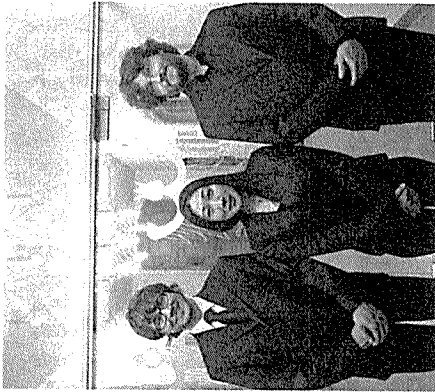
が先駆ける存在だ。パイプオルガンは地方のホールにも浸透。独特の荘厳な響きに触れる機会が増え、ピアノなど他の楽器から乗り換える子供が出てきたという。

「当時習い始めた世代が実力をつけ、一線で活躍するようになった」というのが、松居教授の分析だ。

パイプオルガンは楽器の構造が複雑で、操作に力を使う。ドイツ留学中の北村は「忍耐が必要な楽器で、精神性も重視されるだけに、器用で真面目な日本人に合っている。日

バブル期に設置急増、奏者育てる

●ニルンベルク国際オルガンコンクールで優勝した福本茉莉(中央)
©Hans von Draminski ●シュニットガー国際オルガンコンクールの表彰式に出席した北村あゆ美(中央)(photo by JP Kelder)



本人留学生は注目される存在」という。

世界的に実力を認められつつある日本人奏者。ただ、教会音楽が根付く欧州と異なり、国内での発表の機会は多くはない。松居教授は「演奏家として自立するのは難しく、才能ある若手は日本を離れざるを得ない」と懸念する。

ドイツで学ぶ福本は「海外で結果を出して状況を変えたい。日本でのオルガンの認知度を、もう一つ上のステージに上げるのが私たちの世代の使命だと思う」と話す。

ミュージック

ENTERTAINMENT エンタメ